

V. E. フランクル 『夜と霧』 再訪 — “運命” の生き方 —

秋本 倫子

キーワード：強制収容所、『夜と霧』、ホロコーストの生き残り（サヴァイヴァー）、レジリエンス、防衛機制、対処行動
concentration camps, *Night and Fog (Man's Search for Meaning)*,
Holocaust survivors, resilience, defense mechanisms, coping behaviors,

“Etre homme, c'est précisément être responsable”.

Antoine de Saint-Exupéry *TERRES DES HOMMES*

「人間であるということは、とりもなおさず責任をもつことだ」

『人間の土地』サン＝テグジュペリ著 堀口大學訳 新潮社 1955 50.

I. はじめに

ヴィクトール・E・フランクル著『夜と霧』は、ナチスによる強制収容所の生活という限界状況から生還した精神科医による稀有な記録である。本書は、1947年に初版が出されて以来、40カ国語に訳され^{註1}、ベストセラー、ロングセラーとなっている。本邦では、霜山徳爾による訳が1956年に出版され、さらに、フランクルが1977年に出した改訂版も2002年に出版されて（池田香代子訳）、旧版、新版共に多くの読者に読み継がれている。

筆者と本書の出会いは、筆者の大学時代の恩師が、霜山徳爾（上智大学名誉教授、本学元教授。畏れ多いが以下敬略す）あったことに由来する。霜山は古今東西の文学、哲学や宗教学等に通じた大変な博識家であり、すぐれた心理臨床家でもあったが、ヴィクトール・E・フランクルの著書の内容だけでなく本人に会って知った人柄にも多大な影響を受けたようである。フランクルの思想とそのもとなった体験は、霜山の著作や講義の中に“通奏低音”（これは霜山が好んで使った言葉である）として流れている。

フランクルの文章には、自らを問い直させ、勇気と生きる力を奮い起させる力がある。稀に見る医師、心理学者、奇跡の人であると思う。

奇跡とは先ず、強制収容所の劣悪な環境から生還して、学者として、しかし人間味溢れる記録を残したこと。この記録の最初の日本語訳をした霜山は「この本は冷静な心理学者の眼でみられた限界状況における人間の姿の記録である。そしてそこには人間の精神の高さと人

間の善意への限らない信仰があふれている」¹⁾と述べている。加えて فرانクルは、家族のほとんどをナチスに殺されたにも関わらず、戦後、再婚して新しい家族を作り、精神科医として病む人びとのところを癒し、本を執筆し、オーストリアの大学と複数のアメリカの大学で教え、ロゴセラピー研究所を設立し、世界中で精力的に講演を行った²⁾。筆者もフランクルが80歳を過ぎてからの来日で直接講演を聴く機会に恵まれたが、顔を真っ赤にして「それでも人生にイエスと言う」と叫ぶ力強い語り口に圧倒された記憶がある。彼は90歳で自伝を書き、92歳で亡くなった。強制収容所でとことん酷いしうちを受けた人がそこまで生き延びて活躍し続けたことには驚嘆させられる。

ナチス・ドイツが、第二次世界大戦中に組織的に行った大虐殺はホロコースト (Holocaust)^{注2}と呼ばれている。過酷な状況下で人間の精神がどのような影響を被るかについて、最近ではトラウマ trauma という言葉が使われる。それは小西³⁾によれば「人間の対処能力を超えたできごとを経験して、それを経験したあとにいろいろな心身の不調が持続的にあらわれる状況」である。「身の毛もよだつ怖ろしい事件をとおりぬけた人々は必ず心理的傷害をこうむる」⁴⁾とジュディス・ハーマンは言う。

1980年に、外傷後ストレス障害 (posttraumatic stress disorder : PTSD) という診断が精神医学の診断体系に採用され、それ以降、さまざまな種類のトラウマの被害を受けた人の治療に関する莫大な量の研究文献が生み出され、また、圧倒的な体験に対して人がどのような反応を示すのかについての科学的研究が爆発的に増加した⁵⁾。そして戦争や災害、その他心に傷を被るような時には、その後遺症である PTSD の発症が懸念されるようになった (症状が2日から4週間までの時は、急性ストレス障害 Acute Stress Disorder あるいは ASD という (PTSD, ASD の診断基準は付録を参照)。そのことは、テレビや新聞でも PTSD という語がしばしば使われるようになったことでわかる。では、ホロコーストの体験者は、ASD あるいは PTSD になっていたのだろうか。そのような現代の精神科的診断基準に当てはめないまでも、トラウマ的心理的反応として見た場合はどうだろうか。フランクル自身はどうだったのだろうか。また、精神分析の用語で言えば防衛機制 (defense mechanisms)、またストレス心理学で言えば対処行動 (coping behaviors) に関しては、何をしていたのだろうか。

II. 目的と方法

1. 本稿の目的は、強制収容所に囚われていた時より92歳で亡くなるまでのフランクルの心理的反応、対処行動を、ホロコーストを引き延びた他の生き残りの人々 (ホロコースト・サヴァイヴァー Holocaust survivors) のものと併せて検討することによって、限界状況における人間の、またそのような人の“その後”の生き方の可能性を改めて模索することである。

ちなみに、ここでの防衛機制 (defense mechanisms) とは、「それを意識することによって、不安、不快、苦痛、罪悪感、恥などを体験するような情動や欲動を意識から追い払い、無意識化してしまう自我の働き」⁶⁾、対処 (coping) とは、「能力や技能を使い果たしてしまうと判断され自分の力だけではどうすることもできないとみなされるような、特定の環境からの強制と自分自身の内部からの強制の双方を、あるいはいずれか一方を、適切に処理し統制していこうとしてなされる、絶えず変化していく認知的努力と行動による努力」であり「プロセス」とする。対処の概念は動物実験と精神分析的自我心理学の両方に由来するが、対処反応と自動的に行う反応の区別はいつでもはっきりしているわけではない⁷⁾。

2. 研究方法

以下の3種類の文献について検討を行う。

- (1) V. E. フランクル著 『夜と霧』^{注3)}
- (2) フランクル本人による回想録や他の研究者がフランクルについて書いた文献。これらにより、“ホロコースト後”のフランクルの人生が明らかになる
- (3) ホロコーストによる心理的影響に関する、精神医学、トラウマ心理学等の文献

Ⅲ. V. E. フランクル『夜と霧』

1. “強制収容所監視者”の被収容者に対する扱い

本書の全てが、このことについての報告でもあり、フランクルの言葉をそのまま借りるのが適切であるが、仮に要約するとすれば、人間を人間とも思わず、死に追いやることも何とも思わない、ただ「被収容者番号」⁸⁾としての扱いだった。身分を証明するものを全て剥奪され、「被収容者番号—フランクルの場合は119104」に貶められた。自由の剥奪、殴られたり蹴られたりする暴力、愚弄、飢え、寒さ、強制的な重労働、「ガス室送り」という恐怖との隣り合わせ、自殺願望、人が死んでゆくこと、愛する家族との別離、非衛生的な生活、発疹チフス、終わりが見えない絶望的な状況、こういったものが、被収容者が置かれていた状況だった。

2. 執筆の動機と姿勢

フランクルは、心理学者として科学者として、できるだけ客観的な姿勢で、「すでに数十年前から知られている拘禁にかんする心理学や精神病理学に寄与するもの」を、しかし「必要な場合には個人的な経験を記述する勇気を奮い起」こして書こうとした⁹⁾。「ここでは、偉大な英雄や殉教者の苦悩や死や語られない。語られるのは、おびたしい大衆の『小さな』犠牲や『小さな』死」であり、彼は、名の知れぬ普通の人々に寄り添おうとした¹⁰⁾。名の知れぬ普通の人々、と言っても、彼らは全員「番号」しか持たない被収容者であり、名前を失っていた。どこの誰なのか、と特定できるものは、本書の中には登場しない。

主語は、ナチス側の人間やその手下となった“カポー”は別とすると、まず第一に「被収容者」¹¹⁾、一般的に人を指す「人」、「人びと」¹²⁾「同僚」¹³⁾、そして、よく使われているのが「わたしたち」¹⁴⁾「わたし」「自分」¹⁵⁾である。「わたしたち」「自分たち」が、上記の「名の知れぬ普通の人びとに寄り添う」ことであり、仲間意識を示す言葉なのだろう。「わたしたち」は皆経験を共有している。「・・・(部分略)とにかく生きて帰ったわたしたちは、みなそのことを知っている。わたしたちはためらわずに言うことができる。いい人は帰ってこなかった」¹⁶⁾と。

フランクルは敢えて、自らが強制収容所からの生還を成し遂げた英雄（もっとも、収容所から出た人びとを待っていたのは歓迎ではなく失意だった¹⁷⁾）とはならず、崇高な死を遂げなかった平凡な人びとの仲間自らを入れたのである。「わたし」は特別な個人ではなく、「・・・『ごくふつうの』被収容者だったと、ただの119104番でしかなかったと、胸を張って言いたい」¹⁸⁾。さらに、「・・・わたしたちの心理学的研究はまだ序の口だ」とある¹⁹⁾。この「心理学的研究」の対象は「わたしたち」である。

この研究には焦点があった。「ひいてはほんの数パーセントの生き延びた元被収容者と、彼らの特異で、心理学的に見てまったく新しい人生観への理解を助けることが、ここでの眼目なのだ」²⁰⁾。ここで、気づくことがある。この数パーセントというのは、フランクルを含んでいるはずだということだ。そして、フランクルがこの「まったく新しい人生観」を説いたのだから、生き延びた人たちは、彼によって新しい人生観を見出すことができた者たちだということである。

3. 『夜と霧』に見られる心理的反応と防衛機制（対処行動）

上記のような記述スタイルの性質から、本書に書かれている心理的反応や防衛機制または対処行動が、どこまで被収容者一般あるいはその一部のもので、どれが彼自身のものかは、しばしば峻別しにくい。したがって、以下の分析においても多少の混乱が生ずるがお赦し願いたい。

フランクルは、既に持っていた「拘禁にかんする心理学や精神病理学」の知識に基づいて、収容所生活への被収容者の心の反応を、以下の三段階に分けている。彼は、自ら、これらを体験する運命にあった。

A：収容される段階

B：収容所生活そのものの段階

C：収容所からの出所ないし解放の段階

A：収容段階

1) **収容ショック** (太字は筆者による)²¹⁾：何重にも鉄条網がはりめぐらされた収容所に着き、この収容ショックと言うべき恐怖の状態に陥った。

2) 性来の**楽天主義**：上記の状態から、(実は特別に選別された人たちだったのだが) 栄養状態が良好に見える被収容者たちを見て、「このとき以来、何度も過酷な状況を乗り越えさせてくれたわたしの性来の**楽天主義**は、この事実にしがみついた」²²⁾。

3) **恩赦妄想のような空想**：さらに、「死刑を宣告された者が処刑の直前に、土壇場で自分は恩赦されるのだ、と空想し始める」「それと同じで・・・わたしたちも希望にしがみつき、最後の瞬間まで、自体はそんなに悪くないだろうと信じた」²³⁾。実際には事態は悪かったのだが、ここで他の被収容者もフランクルも、楽天的に考えたり良い未来を空想したりするという防衛機制に走ったのである。

4) **否認あるいは打ち消し**：フランクルは、強制収容所の中で、自らの体験をメモしていた。「消毒」のために、持ち物を全て手放すように命令されたとき、古参の被収容者のひとりに腹を割って、その「学術書の原稿を・・・持っていたいんだ」と言った。しかし、古参の囚人は「糞つたれ！」と怒鳴ってこの懇願をはねつけた。「このとき、わたしはこの次第のみこんだ。そして、この第一段階のクライマックスにおける心理学的反応をした。つまり、それまでの人生をすべて**なかったこと**にしたのだ」²⁴⁾。大切に書きためていた原稿を奪われ、取り戻せないと思ったとき、その喪失感、苦痛から身を守るために、過去はあたかも存在しなかったかのように生きることにした。しかし、これが一時的な防衛であって、記憶を本当に消したわけではなかったことは、彼が原稿を再現して『夜と霧』を書き上げたことでわかる。また、人生の回想録²⁵⁾も書いている。

5) **やけくそのユーモア**：「みっともない裸の体のほかには失うものはなにもない」ことを知ったとき、シャワーが降り注いでいる間、「程度の差こそあれ冗談を、とにかく自分では冗談のつもりのことを言いあい、まずは自分自身を、ひいてはおたがいを笑い飛ばそうと躍起になった」²⁶⁾。フランクルはもとよりユーモアのセンスに溢れていて、それは例えば回想録²⁷⁾やクリンバーク・ジュニアによる記録²⁸⁾を読んでもわかるのだが、このような危機的な時にも、習慣となっていたユーモアが使われたのである。ここでの主語は「わたしたち」となっており、ユーモアという形で反応したのは少なくとも複数の被収容者だった。

6) **好奇心**：この先どうなるのだろうかという**好奇心**。ここでも好奇心という反応を示したのは、フランクルだけではない。「わたしたちは好奇心の塊だった」。しかし、それは通常的好奇心ではなく、「世界をしらっと外からながめ、人々から距離をおく、冷淡と言ってもいい好奇心・・・さまざまな場面で、魂をひっこめ、何とか無事やりすごそうとする傍観と受け身の気分が支配していた」²⁹⁾。しかし、フランクルの場合は、この自己防衛つきの好奇心

により、「人間にはなんでも可能だ」「人間はなにごとにも慣れる存在だ、と定義したドストエフスキーがいかに正しかったか・・・どこまでも可能だ」という驚くべき発見をした。衛生状態も悪く、栄養もなく、寝るための毛布も9人に2枚しかないような状態で、だれひとり、鼻風邪ひとつ引かず、歯磨きもしないのに歯茎は以前より健康だった³⁰⁾のである。しかし、これは収容されてから数日後の状態である。もちろん長続きはしなかったことが後で示される。

7) 「**解離 dissociation**」の中の**疎隔感 (feeling of detachment)**：ほかの被収容者が何度も殴り倒されるのを見ても「無関心に、なにも感じずにながめていられる。心に小波さざなみひとつたてずに」³¹⁾というような、「観察する自我と経験する自我の解離」により「トラウマに関する感覚や情緒と接触しないようにする」反応は、急性ストレス障害 (Acute Stress Disorder), PTSD において典型的に見られるものである³²⁾。

8) ある**世界観をふまえた基本姿勢**³³⁾：「ほとんどすべての人に、たとえほんのいつときなりと自殺を思わせたとしても不思議ではない」状況で、彼は、「とくに落ち込んだ部類にははいら」ず、また初日に、「鉄条網に走ることはけっしてすまい」³⁴⁾と誓った。そう決心したのは、独自の世界観をふまえた基本姿勢があったからであり、それが彼の生きる為の哲学となっていたからである。

B：収容所生活の段階

1) **感情の消滅段階**：数日経つと、この段階に入った。家族に会いたいという感情、醜悪なものに対する嫌悪、サディスティックに殴られている仲間を無関心に眺める。嫌悪も恐怖も同情も怒りもない。心が麻痺してしまったのだ。このような**麻痺、感情反応の欠如の感覚**も解離の症状と言える³⁵⁾。

فرانクルは、スープを「ががつと飲みながら、ふと窓の外に目をやった。そこではたった今引きずり出された死体が、据わった目で窓の外をじいっとのぞいていた。二時間前には、まだこの仲間と話をしていた。わたしはスープを飲み続けた。もしも職業的な関心から自分自身の非情さに愕然としなかったとしたら、このできごとはそもそも記憶にとどまりもしなかったと思う。感情喪失はそれほど徹底していた」³⁶⁾。あまりにもショッキングな光景である。感情が麻痺していた方が、そしてあたかも自分とはまったく関係ない出来ごとのようにみなした方が楽に違いない。しかし、フランクルの場合は、医師・心理学者としての関心が、完全な感情喪失に陥ることを押しとどめていたということである。

「異常な状況では異常な反応を示すのが正常なのだ」³⁷⁾。このような状況では、いちいちショックを受けたり悲しんだりしてはられない。「・・・感情の消滅は、精神にとって必要不可欠な自己保存メカニズムだった」³⁸⁾とフランクルは分析している。

2) **いらだち**：これも感情消滅とならんだ被收容者心理のきわだった特徴で、空腹や睡眠不足という肉体的要因が影響していた³⁹⁾。フランクルは、見回りの時にどなっても効かない患者たちがいると、「手を上げないよう、全身の力をふりしぼるのだった」⁴⁰⁾という。

時に、強い怒りが生じた。彼は、「暴力やその肉体的苦痛に伴う愚弄」が引き金になって、「かなり感情が鈍磨した者でもときには憤怒の発作に見舞われる」として、彼自身「かっと頭に血がのぼった」ことがあったことを告白している⁴¹⁾。人間の尊厳や価値を奪おうとする者の態度に対して、彼は激しく抵抗した。そのような態度は、彼自身の生き方とは正反対だったからだろう。

3) **記録すること**：彼は医師という職業の使命感、良心から、このような辛い場面を記憶し、記録し、記録することを敢えて自らに課したのだが、これも、一種の対処行動と考えて良いかも知れない。しかし、霜山⁴²⁾は書いている。「もし自分がアウシュヴィッツに送られたら、果たしてそれだけの勇気と、それだけの学問への愛があったであろうか・・・」。筆者も不思議に思う。「被收容者は考えられるかぎりの最悪の栄養不足に悩まされていた」⁴³⁾ 状況で、自分自身の衝動や欲求から距離を置いた客観的、冷静な記録する気力と知力を維持できるものだろうか。フランクルが書いている通り、「人間にはなんでも可能」⁴⁴⁾なのだろうか。これは、やはりこれは想像を超える。

4) **精神科医・心理学者として**：人間存在を徹底的に貶めようとする相手の試みに対しても、フランクルは専門医であるアイデンティティと誇りを失わなかった。彼はそれによって、「みずから運命をその手でつかむ」⁴⁵⁾ ことをした。たとえば、彼の作業グループのカポーの相談に親身になって乗ったことで⁴⁶⁾、このカポーのおかかえ精神科医として、彼のそばで進行させてもらえるというような特権を得た。医師であることで、発疹チフス病棟の担当になり、入れられていれば死んでいただろう労働中隊に入ることを免れた⁴⁷⁾。また、心理学者であったことで、收容所の医師から降霊術の場に招かれ、以前はほとんど縁がなかったことを経験する機会を得た⁴⁸⁾。

5) **悪夢**：フランクルは、“**被收容者の夢**”について書き、悪夢にうなされている仲間を揺り起そうとして思わずやめたことを書いている⁴⁹⁾が、フランクル自身は悪夢を見なかったのだろうか。ここでは明確に述べられていないが、フランクルも悪夢にうなされていたと推測することができる。1995年、彼が90歳の時に出版された回想録には、「私は、高校卒業試験の夢は一度も見たことがないが、強制收容所にいる夢はいまだによく見る」⁵⁰⁾とあるからだ。フランクルにも強制收容所の体験から来るトラウマ反応はあり、それは何と晩年まで遷延していたのだ。フランクルが、トラウマ的心理反応に特徴的な**侵入的・反復的**反応を、時期は限られていたかも知れないが示していた証拠がもう一つある。彼はウィーンに戻った最初の朝、愛する妻ティリーが、ベエルゲン＝ベルゼンで亡くなったことを知った。うわさでは、

夜ジプシーたちが死体の一部をナベにいれ、野営のたき火で煮ていたという。「それから数週間、わたしはジプシーたちがティリーの肝臓を食べている強迫観念に悩まされた」⁵¹⁾。

6) **内面への逃避**：これは、生き残るために強さをもたらす心理的な対処行動だった。「強制収容所に入れられた人間は、その外見だけでなく、内面生活も未熟な段階にひきずり下ろされたが、ほんのひと握りではあるにせよ、内面的に深まる人びと」もいて、そのような感じやすい人びとがむしろ精神にそれほどダメージを受けなかったと言う。その具体例として、彼は個人的な話をする。彼は「妻の姿をまざまざと」見て、「この世にもはや何も残されていなくても、心の奥底で愛する人の面影に思いをこらせば、ほんのいつときにせよ至福の境地になれる」⁵²⁾ という自らの体験を述べている。“逃避”という表現はネガティブである。しかし実際には、人は、それが現実への必要な直面を妨げない限り、空想によってどれほど救われているか知れない。人間は、想像力によって、過去へでも未来でも、文学や芸術作品の中へでもあるいは世界や宇宙のどこにでも、既に亡くなった人のもとにさえ飛んで行くことができるからである。空想の行く先を豊かに持っている人は幸せである。

7) **精神の自由**：「主体性をもった人間であるという感覚の喪失は、強制収容所の人間は徹頭徹尾、監視兵の気まぐれの対象だと身をもって知るためだけでなく、自分は運命のたわむれの対象なのだと思ひ知ることによっても引き起こされた・・・人生なにが幸いするか禍いするか・・・が10分、あるいは5分もたたないうちに判明する経験を、わたしたちはいやと言うほどしたのだ」⁵³⁾。このような状況に長く置かれた人間は、徹底した無力感、無気力に陥るだろう。しかし、フランクは自ら決断することを放棄せず、脱走を試みもしたし、また逆に友を見棄てないために脱走を止めた⁵⁴⁾。一度アウシュヴィッツで奪われた学術書の原稿の再現にも取りかかっていた⁵⁵⁾。何が彼をそうさせたのか。

彼は問わざるを得なかった。「・・・人間の自由はどこにあるのだ・・・精神の自由はないのか、と。人間は、生物学的、心理学的、社会的と、なんであれさまざまな制約や条件の産物でしかないというのはほんとうか、すなわち、人間は体質や性質や社会的状況がおりなす偶然の産物以外のなにもものでもないのか、と。そしてとりわけ、人間の精神が収容所という特異な社会環境に反応するとき、ほんとうにこの強いられたあり方の影響をまぬかれることはできないのか、このような影響には屈するしかないのか、収容所を支配していた生存『状況では、ほかにどうしようもなかったのか』と。こうした疑問にたいしては、経験をふまえ、また理論にてらして答える用意がある。経験からすると、収容所生活そのものが、人間には『ほかのありようがあった』ことを示している」⁵⁶⁾。“選択肢がある”ことを体験したのである。

フランクによれば、収容所内には二種類の人びとがいた。「収容所はその人間のどんな本性をあらわにしたかが、内心の決断の結果としてまざまざと見えてくる」⁵⁷⁾。

①自由も尊厳も放棄して外的な条件に弄ばれるたんなるモノとなりはて・・・環境の力の

前にひざまずいて墮落に甘んじる人びと、と

②そのような墮落を拒否する人びと。周囲はどうであれ「わたし」を見失わなかった英雄的な人びと

である。

①の人びとは、未来と生きる意味を失い、自己放棄と破綻に陥り、「よりどころを一切失って、あつというまに崩れていった」⁵⁸⁾。フランクル自身は、自分は英雄ではないと述べていたが、①のような敗北的な生き方はしなかった。②は「このような高みにたつることができたのは、ごく少数のかぎられた人びとだった」「苦渋にみちた状況ときびしい運命がもたらした、おのれの真価を発揮する機会を生かし・・・収容所にあっても完全な内なる自由を表明し、苦悩があってこそ可能な価値の実現へと飛躍できたのは、ほんのわずかな人びとだけだったかもしれない。けれども、それがたったひとりだったとしても、人間の内面は外的な運命より強靱なのだということを証明してあまりある」⁵⁹⁾であるから、彼自身がその少数に含まれていただろう。あるいは、彼は、「ガス室に入っても毅然として祈りのことばを口にする存在」、つまり「最もよき人々は帰ってこなかった (die Besten sind nicht zurückgekommen⁶⁰⁾」というその「最もよき人々」こそを、最も勇気ある者として称えたかったのかも知れない。

フランクルの心理状態にも、よく読めば微妙な変化、揺れが認められる。彼は、収容所に入れられる前から、精神科医としての経験から「ある世界観をふまえた基本姿勢」を持っていたが、しかし、どう振る舞えば命が助かるのか不確実な場面（たとえば、ガス室送りの者を決める選別場面）で「なりゆきに任せた」⁶¹⁾ことが、何度もあったと述べている。しかし、最終的には、運命の前にただ受け身的になり、墮落していくことを選ばなかった。これには、収容所内の経験から学び、鍛えられていったところもあるのではないかと、筆者は考える。収容所では、日常のほとんど全てが苦しみだった。そして、常に生死と隣り合わせであり、生死を分かち決断を待たずに求められることがしょっちゅうあった。

「わたしたちを取り巻くこのすべての苦しみや死には意味があるのか、という問い」にさいなまれた。『『生きること』の意味だけに限定されない、苦しむことと死ぬことの意味にも裏づけされた、総体的な生きることの意味だった。この意味を求めて、わたしたちはもがいていた」⁶²⁾。つまり、この「総体的な生きることの意味」の回答は、容易に得られたわけではなかった。しかし、もがいた後に、「コペルニクスの転回」⁶³⁾に到達する。

「ここで必要なのは、生きる意味についての問いを 180 度転換することだ。わたしたちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ」⁶⁴⁾。死ぬこと、苦しむことも含めての生きる意味が明らかになると、苦しむことの「意味深さにもはや目を閉じようとは思わなかった」⁶⁵⁾。

フランクルは、被収容者が自己放棄から死に至るのを食い止めようとする居住棟長に依頼

され、居住棟の仲間たちに向かって語った。「生存率は5%と見積もっていた・・・にもかかわらずわたし個人としては、希望を捨て、投げやりになる気はない・・・なぜなら、未来のことはだれにもわからないし、つぎの瞬間自分になにか起こるかさえわからないからだ・・・」
「人間が生きることには、つねに、どんな状況でも、意味がある、この存在することの無限の意味は苦しむことと死ぬことを、苦と死をもふくむのだ・・・」。言わば集団心理療法と言える。フランクルが力をふりしぼって語った結果、魂を揺り動かされた者がいた。「それからほどなく・・・居住棟の梁に電球がひとつもった。そしてわたしは、涙を浮かべてわたしのほうへ、礼を言おうとよろめき寄ってくるぼろぼろの仲間の姿を見たのだ」⁶⁶⁾。

このスピーチは、強制収容所に入れられたことのない人間、たとえば筆者のこころをも揺さぶる。

「それはなにも強制収容所にはかぎらない。人間はどこにいても運命と対峙させられ、ただもう苦しいという状況から精神的になにかをなすとげるかどうか、という決断を迫られるのだ」⁶⁷⁾とフランクルが書いているように、ある年数を生きてきたら、答えのない選択、困難な選択を迫られた経験はおそらく誰でもあるはずだ。そして、思い出せないものも含めれば無数にあるであろう選択のうち、どれほどのものを、「精神的になにかをなすとげる」ために、責任を持って行ってきただろうか。そう自問すると、自分が幾度となく「運命」に甘んじ、責任を回避したことを、そして、その結果の今現在があることを、痛恨の思いを持って白状しなければならない。

C: 解放段階

1) **完全な精神の弛緩**: 夢見ていた自由が手に入ったとき、生じた反応は、歓喜ではなかった。「極度の緊張の数日を過ごしたのち、ある朝、収容所のゲートに白旗がひるがえったあの時点・・・この精神的な緊張のあとを襲ったのは、完全な精神の弛緩だった」⁶⁸⁾。

2) **強度の離人症**: 解放という現実が「意識のなかに押し寄せるには、まだ時間がかかった。わたしたちは、現実をまだそう簡単にはつかめなかった」。最初は、野原いちめんの花が咲いているのを見ても、「そういうことはよくわかる。だが『感情』にはたっしない」。「わたしたちは、まさにうれしいとはどういうことか、忘れていた。それは、もう一度学びなおさなければならないなにかになってしまっていた」。「・・・心理学の立場から言えば、強度の離人症だった。すべては非現実で、不確かで、ただの夢のように感じられる」⁶⁹⁾。数年間のつらい生活と、外の生活の落差が大き過ぎて、再適応が困難だったのだろう。このショックは、「精神的な潜水病」に喩えられている⁷⁰⁾。

3) **欲求の解放**: 体の方が精神よりも先に現実を把握し、「わたしたちはががつとむさぼり食ったのだ・・・人はどれだけ食べることができるのか、信じがたいほどだった」。また、

食べ、コーヒーを飲むと、「何時間もかかる、彼の物語を」語り始めた。「彼は語らずにはいられないのであり、話さずにはいられないのだ」⁷¹⁾。

4) **新しい人生へ**: やがて、何日もたってから、感情がほとぼしり、「あなたは (du) ……^{注3)}」
「雲雀があがり、空高く飛びながら歌う讃歌が、歓喜の歌が空いちめんに響きわたるのを聞く」
そして、「あなたの新しい人生は始まったのだ ……あなたは再び人間になったのだ」⁷²⁾。

なぜか、ここでのみ主語は「あなた (du)」になっている。この「あなた (du)」はフランクル自身を指すと思われる。ここで、「あなた」は歓喜に包まれているが、フランクル自身を待ち受けていたのは、手放しに喜べる現実では全くなかった。

2) **不満と失意**: 未成熟な人間は、「相かわらず権力や暴力といった粹組にとらわれた心的態度を見せることがしばしば観察された」⁷³⁾。フランクルはその未成熟な人間ではなかったが、フランクル自身、待っているはずだった家族が誰もいない、という失意のどん底に落とされる。フランクルはそのことを他人事のように、「少なからぬ数の解放された人びとが、新たに手に入れた自由のなかで運命から手渡された失意」⁷⁴⁾と距離を置いて書き、「そうは言っても、精神医をめぐらせることはできない。その反対に、奮い立たせる。ここには使命感を呼び覚ますものがある」。つまり、新たに生きる目的を見出したのである。それは、容易なことではなかったはずなのだが。

IV. ホロコースト・サヴァイヴァーたちの心理的反応

ホロコースト後の人生において、生き残ったサヴァイヴァー survivors たちが、健康で幸福な幸せを取り戻せるか、それとも彼らはそれ以外の人々と比べて脆弱なのかについては、多くの研究がなされてきている。たとえば15年ほど経って、アメリカ在住のホロコースト被害者の「強制収容所症候群」について Paul Chodoff⁷⁵⁾が行った研究では、23名の対象者のうちのほとんどが、(1) ちょっとした物音にぎょっとする、不眠、悪夢のような不安症状、(2) 身体症状、(3) 独りになることの恐怖、(4) 強制収容所での体験の強迫的、反芻するような想起 (5) 抑うつ症状 (6) 人格変化などを現していた。記憶や集中の欠如を訴えた13名の対象者のうち、脳器質的な病理があったのは5名のみであった。収容所から解放された直後は、元の家に戻り家族に会えるという空想が無残にも打ち砕かれ、自己愛にとっても打撃となり、症状が増加した。生き残ってしまったことに対する罪悪感 “survival guilt” も顕著だった。肉体的、情緒的、知的資質に恵まれていたお陰で運をつかみ、アイデンティティを作り直し、生産的な生活をするようになり、症状がやがて記憶に変化していった人々もいた。また、アメリカに移住してから、成功して、元の経済的・社会的地位が上がった者もいたという。Chodoffは、症状を遷延させる要因を8つ挙げている。①親との離別など、幼少時からのストレス体験②脳器質的要因③家が破壊されていたり家族が死亡していたりしたこ

と④解放後の現実が、空想に抱いていた内容と大きく食い違っていたこと⑤内的資質の不十分さあるいは生活再建を外部から援助するものがなかったこと⑥社会経済的身分の低下、特に高齢者の場合⑦米国に移住後、満足のいく適応ができなかったこと⑧無意識レベルでの葛藤。元気になりたい一方で、復讐や償いのために苦悩し続けたいと願う無意識レベルでの葛藤である。

これら8つのうち、 فرانクルが当てはまるのは③と④の2つである。フランクルは、空想の中で「妻の姿をまざまざと見た」り、「愛する妻との会話」をしたりしたが、「愛する妻がまだ生きているのか、あるいはもう生きてはいないのか、まるでわからなかった…だが、そんなことはこの瞬間、なぜかどうでも良かった」⁷⁶⁾と言っている。しかし、「それでもフランクルは生き残り、若くて健康なティリーが生きていると信じていた」⁷⁷⁾。愛する相手の生死が、予想と違っていたこと、母も妻も殺されていたこと（ナチスはユダヤ人の一掃を目指していたので、これはかなりのサヴァイヴァーたちに当てはまったようだ）は、多くのサヴァイヴァーたちにとって、強烈な精神的打撃になったに違いない。後述するように、フランクルにとってもそうだったのだが、上記の8つの条件のうち、この③④以外については、彼は比較的恵まれていたと思う。

最近の研究だと、ホロコーストの時点で子どもだった人々が、50年以上たっても、回避、侵入、不安症状など、ホロコーストの影響と思われる症状を持っているという研究⁷⁹⁾や、時に三世代にわたって脆弱性が受け継がれるという研究⁸⁰⁾がある一方で、特に英雄でも何でもない普通の人々が、高齢まで、ホロコーストを生き抜いてきていることが少なくないとする研究もある。

たとえば Greene⁸¹⁾ は、レジリエンス **resilience** という概念を鍵として、ホロコーストのサヴァイヴァーたちは“無力だ”という見方に挑戦している。ここでのレジリエンスの定義は、1. 危険など、異常な状況に適応し、逆境を前にしても前向きで予想外の結果をもたらすこと、2. 一生を通じて、有能さ competence を維持する能力。ホロコースト・サヴァイヴァーの場合は、人生が移りゆく中で、どの程度自分たちの有能さを保てたかの程度、の2つである。対象者は、アメリカ在住のホロコースト・サヴァイヴァー 133名で（半数近くが80～85歳）で、出身国は11カ国以上に分かれていた。質問紙と面接の両方により、戦前・戦後の家族状況と、ホロコーストの間に、適応するためにどのような方略を用いたかを調べた。その結果、得られたテーマ（方略）は次のようなものであった：1) 生きようとする意志、2) 食べ物と住む場所の確保、3) 生き残るための手段を選ぶこと、4) 家族のきずなを維持すること（家族を救おうとすること）、5) 友達を作ること、6) 他の人の力を借りる、あるいは結束すること、7) 他者を思いやること、8) 地域共同体とつながること、9) 証言を行うこと、10) 学校のプログラムを設立すること、11) 歌、詩、物語を作ること。

そして Greene の研究の結論は、「ホロコーストの苦しみを否定するつもりではない」が、サヴァイヴァーたちは無力ではなく、戦後結婚して子供を持った者も多く、生活を再建していくことができた、というものであった。

フランクルの収容所での行動と、文献からわかるその後の彼の人生を上テーマと比較してみよう。彼は、1) の生きようとする意志・目的を持っており、2) 生きるために、時には盗んでも食べ物を得ようともした。3) 彼にとっては、脱走するかどうかも含めて、一瞬一瞬が、決断、選択の連続だった。4) 彼は空想の中で、妻と共にいる幸せを味わい、妻も自分を想っていることを想像した。その空想は現実とはならなかったが、戦後、再婚した相手のエリーは、傷ついたフランクルのころを大きな愛で包み、彼の後半の人生を大きく支えた。フランクルの死後、エリーは言っている。「私たちはとても深い愛で結ばれていたの・・・深い愛がなければ、私たちはあれだけの仕事をけっしてやりとげられなかったわ。だから、これは、結婚以上なのよ」⁸²⁾。また最近では朝日新聞の記者の取材に応じて次のように述べている。「私たちが出会ったとき、彼は2冊の本を書き上げて、生きる意欲をなくしていた。私たちは食べるのも忘れて語り合い、彼は自分の苦悩を話してくれた。私は彼の話に打たれ、この苦悩に満ちて悲しそうな人をどうやって救い出そうかと考えた。彼は一通り話した後で終止符を打つように『もうこれで話した。すべて終わりだ』と言ったの」⁸³⁾。フランクルが1950年に出版した『苦悩する人間』には彼の直筆によるエリーへの献辞が残されていた：

エリーへ

あなたは、苦悩する人間を愛する人間に変えてくれました。

ヴィクトール⁸⁴⁾

5) 及び6) 収容所内でも、解放されてからも、彼には友人や仲間がいた。7) どのような非情なしうちを受けても、彼自身は非情にはならなかった。死にゆく仲間、自殺しようとする仲間を思い、「やっぱり逃げるのか」と問われて、脱走も止めた。「苦しむ人を見ると同情心が胸が張り裂けそうになる・・・彼は人びとを悲しみの淵から引き上げずにはいられないのだ」⁸⁵⁾。8) 戦後、彼は世界中を飛び歩いて、講演をした。9) 著書も、講演も、フランクルの生き方そのものが証言である。ただし、彼はナチスを憎まず、ホロコーストを糾弾しようとはしなかったという。10) 彼はウィーンのみならず、アメリカの大学でも教鞭を執り、パークリーに「ロゴセラピー研究所」を創設した。11) 物語を書いた。彼自身の物語である。彼は書くこと、語ることによって、自身の体験を彼の臨床哲学を支える具体的な事例に練り上げていった。また、精力的に著作を残した。

こうしてみると、フランクルは、Greene が挙げている、レジリエンスに結びつく10の

全てのテーマを体現していた。その他にも、フランクルのレジリエンスを支えた特筆すべき要因として、次の5つを挙げたい。

(1) **高度な知的能力と豊かな人間性**：収容される前から人生後半までを通じて、卓越したユーモアのセンス（これは「つねに陽気でユーモラスだった」⁸⁶⁾ 彼の原家族から受け継いだものだろう）、好奇心、即断即決する機転の速さあるいは直観力（それがしばしば彼の命を救った）、そばにいない妻と心の中で生き生きと会話できるほどの想像力、衝動をコントロールする能力（これが彼の尊厳を守り、自殺にも至らせなかった）、他者の苦しみに共感しながらも他者や自身の苦悩から距離を置いて観察する能力。これらは、彼の高度な知性や対人能力と関係しており、生育歴や教育に恵まれたにせよ、まさに「賜物」と言って良いだろう。精神科医になるために受けた教育や臨床経験にも多くを負っているだろう。

(2) 上記と関連して、**精神科医であったこと**：これは収容所仲間やナチス親衛隊員、カポーと関わるときに知恵として役立った。特に、カポーの悩みを親身に聴いたことで、「お抱え医師」にしてもらえることができた。医師としての役割を収容所内で与えられ、自殺しようとする者たちを思いとどまらせたことは、彼のアイデンティティと使命感を強くした。彼は、アウシュヴィッツにいた時に、発疹チフスにかかったが、「失った草稿を再構成しようという決意が、明らかに私を生き残らせたのだと確信している」⁸⁷⁾ と回想録の中で述べている。それが、1945年のうちに初版を出し、世界でほぼ三十カ国語に翻訳されることになった *Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager* 『一心理学者の強制収容所体験』につながった。彼は、両親と弟、そして最初の妻ティリーを失くした悲しみの中でこの原稿をたったの9日間で口述したという。フランクルは、友人のボラックに「両親と妻ティリーのむごい死について話した。すると彼は自分の感情に圧倒され、なにかが堰を切ったように溢れだした。あのストイックなフランクルが、共に見守られていつまでも泣き続けたのだ」⁸⁷⁾。しかし彼は感情の海に溺れることを自らに許さなかった。「こんな出来事がふりかかって、試練に直面しているけれど、これは何かのためであるにちがいないーきっと意味があるんだよ。そんな気がするんだ・・・僕を待っている課題があるような気がする。何かを期待され、要求されているのだとね。その何かを実現していくのが自分の運命だと、強烈に感じている」。彼は、強制収容所に送られる前の1930年代、ウィーン市立精神病院に勤務している間に、自殺の危険がある1200人もの患者と接し、「人生に意味があればその患者は自殺願望から救われると学ばされた」⁸⁸⁾。それが、「苦悩を人間的な業績に変容するという能力を証明することによって、人生から意味を問いとる」人生の意味を問うロゴセラピーのはじまり⁸⁹⁾だった。フランクルは、患者たちに、「人生の意味を求めること」を勧めたのみならず、自らが人生最大の試練に立たされたときに、自らを救い、奮い立たせるために、これを用い、自らの責任において決断を下したのだった。

(3) **愛着関係**: 幼少期に端を発する愛着関係 attachment が、ホロコースト・サヴァイヴァーの後の不安症状等の精神衛生に関係するという所見がある⁹⁰⁾。フランクルの場合ではどうか。彼の『回想録』によれば、「母は心優しい、信心深い女性」で、父親は「人生に対してスパルタ的で…ストイックでもあった」し、ステッキや登山杖でフランクルをぶつこともあった。しかし、フランクルは父を「正義の人」と見ていたし、強制収容所で両親ともを失ったことを非常に悲しんだ。また、父親は、フランクルが（すでに3歳のときに！）医者になる決心をしたことを好ましい思いで見えてくれた⁹¹⁾、とある。クリーンバーグ・ジュニア⁹³⁾は、「エルザ（フランクルの母）は当時の伝統的な母親であり、主婦だった。子どもたちが立派に育ち、家族が情緒的に安定していたのは、この心の温かい有能な母親のおかげだったと言えるだろう」と書いている。これら、また後々の他者や妻に対する愛情の深さからすると、フランクルは幼少期の愛着関係には恵まれており、そのために彼は情緒的に安定した性格とトラウマを乗り越える能力＝レジリエンスを有していたと思われる。彼は、精神科医そして、強制収容所の単なる記録ではなく、どのような時にも「人生には生きる意味がある」ことを、自らの体験を通して伝える本を書いたのである。

(4) **信仰**: フランクルは、敬虔なユダヤ教徒である両親のもとに生まれたユダヤ教徒である。しかし、『夜と霧』の中では、他の被収容者の「宗教的感性のみずみずしさや深さ」に心を打たれたことや⁹⁴⁾、「ガス室に入っても毅然として祈りのことばを口にする（彼以外の存在）」⁹⁵⁾については触れていても、彼自身の信仰については明確に書いていない。むしろ、「運」「幸運」「運命」といった言葉を多用し、「神」という言葉は、「何千もの幸運な偶然によって、あるいはお望みなら神の奇跡によって」⁹⁶⁾と「テヘランの死神」⁹⁷⁾という喩え話の文脈の中でしか使われていない。他に「天の賜物」⁹⁸⁾という表現が使われているが、控えめな使い方である。それ以外で彼の信仰あるいは聖書についての知識を伺わせるのは、妻と心の中で会話をした場面で旧約聖書の雅歌第8章第6節⁹⁹⁾、灰色の朝に明かりがともるのを見た場面でヨハネ第1章第5節¹⁰⁰⁾が引用されていることぐらいである。

それでも、『夜と霧』の中で「人生」「運命」としている言葉は、「神」との関連で考えることができる。彼は自分が一度ならず「幸運だった」¹⁰¹⁾ことを認めているが、彼にとって、「運命—賜物」¹⁰²⁾でもあった。クリーンバーグ・ジュニア¹⁰³⁾は、彼は信仰を個人的なものにとらえ、また古代の聖書写本家のように、神の名を軽々しく唱えることを嫌っていたので、人間の理解を超える神について、気軽に話すことなどとてもできなかったのではないかと推測している。そして、フランクルがエリーに対して、「（母親がアウシュヴィッツで亡くなったと知ったときに）神を信ずる深い信仰がなかったら、僕はあのとき、首を吊っていただろう」と述べたことを証言すると共に、「彼がホロコースト体験を通して、より敬虔なユダヤ教徒となり、一生その信仰を貫きとおしたことを知っている人は少ない。強制収容所での過酷な

試練が、彼を揺るぎのない信仰へと導いた」とも書いている。

フランクルの信仰について詳細に論じることは別の機会に譲りたいが、彼の人生や思想の根底に神への堅い信仰があったことは確かなようである。『夜と霧』の中でそれが、ほとんど隠されたようになってるのは、上述のような彼の神に対する態度に加えて、彼がそれを信仰者としてではなく、タイトルにあるように「心理学者」として書こうとしたからでもあるだろう。

フランクルの死後、彼の信仰について質問されたエリーによれば、フランクルは「50年以上にわたって、毎朝祈ったのよ。誰も知らないけれど」¹⁰⁴⁾という。エリーとの間に深い愛情や絆を深めながら、世界中の苦悩する人々に対して『夜と霧』やそれ以外の著書^{註4)}、大学での講義や世界各地での講演、インタビューなど^{註5)}を通じて、どのような苦悩にも意味があることを一貫して訴え続けることができたのは、強制収容所での過酷な試練に耐え抜いた経験と信仰の両方に、彼の思想が基づいていたからであろう。

最終的に、フランクルにとって、生きるとは何だったのか。「生きるとはつまり、生きることの問いに正しく答える義務、生きることが各人に課す課題を果す義務、時々刻々の要請を充たす義務を引きうけることにほかならない・・・人間は苦しみと向きあい、この苦しみに満ちた運命とともに全宇宙にたった一度、そしてふたつとはないあり方で存在しているのだという意識にまで到達しなければならない。だれもその人から苦しみを取り除くことはできない・・・この運命を引き当てたその人自身がこの苦しみを引きうけることに、ふたつとないなにかをなしとげるたった一度の可能性はあるのだ」¹⁰⁵⁾。フランクルは、人間の責任と選択を徹底的に重視した。

フランクルは晩年、ある日突然視力を失い、8年間、不自由な生活をした。しかし献身的に彼の身の回りの世話のみならず、本や手紙の朗読をしたエリーのおかげで、人びととの交流を続けた。1997年9月2日に、彼は92歳で静かに息を引き取った¹⁰⁶⁾。自らの思想、哲学、信仰を生身で体現した一生だった。

V. おわりに

以上、V. E. フランクルのホロコーストとその後の人生における心理的反応、人生における態度、彼が用いていた対処行動について、その他のホロコースト・サヴァイヴァーたちに関する研究資料を参照しながら、検討した。その結果、フランクルも、強制収容所に収監されていた間とその後の人生において、DSM-IV-TRにあるような診断基準を満たすところまでにはおそらく至らなかったが、トラウマ後に生じる典型的な心理の一部、すなわち、強い恐怖、感情麻痺、関心の縮小、いらだたしさまたは怒り、否認・打ち消し、解離、反復的・侵入的反応を呈していたことがわかった。しかし、それらは、彼が述べるごとく、「異常な

状況」における、当たり前の自己保存メカニズム（魂の自己防衛のメカニズム）¹⁰⁷⁾であったように思われる。そして、彼は、これらの殆んどから回復して、他の人びとが人生に意味を見い出せるように尽力する人生を送ったのだった。対処行動に関しては、彼は、他のホロコースト・サヴァイヴァーが用いていた適応（対処）行動に加えて、高い知性と人格的能力、教育や医師としてのアイデンティティと臨床経験、それに両親譲りのしっかりとしたユダヤ教信仰^{注8}を持っていた。したがって、彼は生き残るために、きわめて豊かな資源 resources を持っていたと考えられる。しかし、能力や立場に恵まれていたとしても、それを無駄に、あるいは悪事の目的に使うことを選択することも人間には許されている。フランクルは、自らに課された試練を、自らが引きうけて答えるべき問い、責任ととらえ、自らに天の賜物があれば、全てをそのために使う生き方を貫いたのであった。

本研究では、『夜と霧』を現代のトラウマ心理学の知見を入れて検討する試みを行った。しかし、今回は、フランクルやホロコーストのトラウマに関する膨大な資料のほんの一端を覗いたに過ぎない。この世に戦火や災害が絶えることはない。今回、『夜と霧』を入口にして垣間見た世界は、途方もなく広大でかつ迂闊には足を踏み入れられない場所のように見えた。しかし、おそらくまた訪れないわけにはいかないだろう。霜山の言葉が脳裡を掠める：「そしてこの病誌はまた別な形で繰り返されないと誰がいえよう。もしわれわれが蛇と闘わないならば¹⁰⁷⁾。

謝辞：筆者が本稿をまとめるのに強力な後押しとなったのは、何と言っても故霜山徳爾先生の、“存在”である。筆者は先生の声やお姿を、昨日のこのように、今でもありありと思い起こすことができる。また、本稿を書いてみて、先生の臨床や講義での謙虚でお優しい、何よりも貧しく弱い人びとの立場に立とうとすのご姿勢が、思っていた以上にフランクルのそれを受け継いでいることに気がついた。今は天におられる先生に深くお礼申しあげます。

引用文献

- 1) ヴィクトール・E・フランクル著 霜山徳爾訳 (1956)『夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録』みすず書房 訳者あとがき, 207.
Viktor E. Frankl (1947) *Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager. Österreichische Dokument zur Zeitgeschichte I*, Wien: Verlag für Jugend und Volk.
- 2) V. E. フランクル著 山田邦男訳 (1998)『フランクル回想録 20世紀を生きて』春秋社, 171. Viktor E. Frankl (1995) *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen (2., durchges. Auflage)*, Quintessenz MMV München: Medizin-Verlag.

- 3) 小西聖子『新版 ト라우マの心理学 心の傷と向きあう方法』NHK 出版, 2012, 30.
- 4) ジュディス・L・ハーマン著 中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房, xiv.
- 5) ベセル・A. ヴァン・デア・コルク, アレキサンダー C. マクファーレン, ラース・ウェ
イゼス編 西澤哲監訳『トラウマティック・ストレス PTSD およびトラウマ反応の
臨床と研究のすべて』誠信書房, 2001, 序文 x Bessel A. van der Kolk, Alexander C.
McFarlane, Lars Weiaeth *TRAUMATIC STRESS The Effects of Overwhelming
Experience on Mind, Body, and Society*, The Guilford Press, 1996.
- 6) 加藤正明・保崎秀夫・笠原嘉・宮本忠雄・小此木啓吾編『精神医学事典』弘文堂, 600.
- 7) リチャード・S・ラザルス スーザン・フォルクマン著 本明寛 春木豊 織田正美訳
『ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究』実務教育出版, 1991, 119-143.
Richard S. Lazarus & Susan Folkman (1984) *Stress, Appraisal, and Coping*, New
York: Springer Publishing Company, 1984.
- 8) 『夜と霧 新版』, 4.
- 9) 『夜と霧 新版』, 8-9.
- 10) 『夜と霧 新版』, 1-2.
- 11) 『夜と霧 新版』, 1.
- 12) 『夜と霧 新版』, 3.
- 13) 『夜と霧 新版』, 6.
- 14) 『夜と霧 新版』, 3.
- 15) 『夜と霧 新版』, 6.
- 16) 『夜と霧 新版』, 5.
- 17) 『夜と霧 新版』, 154.
- 18) 『夜と霧 新版』, 6.
- 19) 『夜と霧 新版』, 28.
- 20) 『夜と霧 新版』, 8.
- 21) 『夜と霧 新版』, 11.
- 22) 『夜と霧 新版』, 14.
- 23) 『夜と霧 新版』, 14.
- 24) 『夜と霧 新版』, 21-22.
- 25) 『フランクル回想録 20世紀を生きて』, 24-25.
- 26) 『夜と霧 新版』, 24-25.
- 27) 『フランクル回想録 20世紀を生きて』, 33-41.
- 28) ハドン・クリンバーク・ジュニア著 赤坂桃子訳 (2006) 『人生があなたを待って

いる 〈夜と霧を越えて〉 1』みすず書房 Haddon Klinberg, Jr. (2001) *When Life Calls Out to Us. The Love and Lifework of Victor and Elly Frankl*. New York: The Doubleday a division of Random House, Inc., 73.

- 29) 『夜と霧 新版』, 25.
- 30) 『夜と霧 新版』, 27.
- 31) 『夜と霧 新版』, 35.
- 32) 『トラウマティック・ストレス PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて』誠信書房, 2001, 序文 x 362-367.
- 33) 『夜と霧 新版』, 28.
- 34) 『夜と霧 新版』, 28.
- 35) 『トラウマティック・ストレス PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて』, 367.
- 36) 『夜と霧 新版』, 37.
- 37) 『夜と霧 新版』, 31.
- 38) 『夜と霧 新版』, 45.
- 39) 『夜と霧 新版』, 104.
- 40) 『夜と霧 新版』, 109.
- 41) 『夜と霧 新版』, 44.
- 42) 霜山徳爾 (2002) 『夜と霧』と私—旧版訳者のことば— ヴィクトール・E・フランクル著 池田香代子訳 (2002) 『夜と霧 新版』, みすず書房, 162.
- 43) 『夜と霧 新版』, 47.
- 44) 『夜と霧 新版』, 27.
- 45) 『夜と霧 新版』, 104.
- 46) 『夜と霧 新版』, 41-42
- 47) 『夜と霧 新版』, 81.
- 48) 『夜と霧 新版』, 57-58.
- 49) 『夜と霧 新版』, 46-47
- 50) 『フランクル回想録 20世紀を生きて』, 130.
- 51) 『フランクル回想録 20世紀を生きて』, 120.
- 52) 『夜と霧 新版』, 58-63.
- 53) 『夜と霧 新版』, 88-89.
- 54) 『夜と霧 新版』, 94-98.
- 55) 『夜と霧 新版』, 97.

- 56) 『夜と霧 新版』, 109-110.
- 57) 『夜と霧 新版』, 111.
- 58) 『夜と霧 新版』, 129.
- 59) 『夜と霧 新版』, 114.
- 60) *Ein Psychologe Erlebt Das Konzentrationslager
In...trotzdem Ja zum Leben. Kösel-Verlag, München.* 19.
前掲の霜山訳(1956)『夜と霧』78. の方が、Frankl の原文(1977)を忠実に訳しており、Frankl の意図に添うものと判断して採用した。
- 61) 『夜と霧 新版』, 16-18.
- 62) 『夜と霧 新版』, 131
- 63) 『夜と霧 新版』, 129.
- 64) 『夜と霧 新版』, 129.
- 65) 『夜と霧 新版』, 132
- 66) 『夜と霧 新版』, 137-140.
- 67) 『夜と霧 新版』, 114.
- 68) 『夜と霧 新版』, 147.
- 69) 『夜と霧 新版』, 148-150.
- 70) 『夜と霧 新版』, 152.
- 71) 『夜と霧 新版』, 150.
- 72) 『夜と霧 新版』, 151.
- 73) 『夜と霧 新版』, 152
- 74) 『夜と霧 新版』, 156.
- 75) Chodoff, P. (1963) Late effects of the concentration camp syndrome. Archives of General Psychiatry, Vol. 8 (4), 323-333.
- 76) 『夜と霧 新版』, 60-63.
- 77) 『人生があなたを待っている 〈夜と霧を越えて〉 1』, 231.
- 78) 山田邦男 (1998) ヴィクトール・E・フランクルについて 『フランクル回想録 20世紀を生きて』, 187.
- 79) Sagi-Schwartz, A., van IJzendoorn, M. H., Grossmann, K. E., Joels, T. et al. (2003) Attachment and traumatic stress in female Holocaust child survivors and their daughters. American Journal of Psychiatry, 160: 1086-1092.
- 80) Shmotokin, D., Shrira, A., Goldberg, S., C., Palgi, Y., (2011) Resilience and vulnerability among aging Holocaust survivors and their families: An

- intergenerational overview. *Journal of Intergenerational Relationships*, 9: pp. 7-21.
- 81) Greene, R., R. (2010): Holocaust survivors: Resilience revisited. *Journal of Human Behavior in the Social Environment*, 20, 411-422.
- 82) 『人生があなたを待っている 〈夜と霧を越えて〉 2』, 509.
- 83) 「ニッポン人・脈・記 生きること 13」 2011年5月10日 朝日新聞夕刊1面
- 84) 『人生があなたを待っている 〈夜と霧を越えて〉 2』, 510.
- 85) 『人生があなたを待っている 〈夜と霧を越えて〉 2』, 484.
- 86) 『人生があなたを待っている 〈夜と霧を越えて〉 1』, 73.
- 86) 『フランクル回想録 20世紀を生きて』 春秋社, 131.
- 87) 『フランクル回想録 20世紀を生きて』 春秋社, 234.
- 山田邦男 (1998) ヴィクトール・E・フランクルについて『フランクル回想録 20世紀を生きて』, 131.
- 88) 『フランクル回想録 20世紀を生きて』, 123.
- 89) 『フランクル回想録 20世紀を生きて』, 118.
- 90) Sagi-Schwartz, A., van IJzendoorn, M. H., Grossmann, K. E., Joels, T. et al. (2003), 1086-1092.
- 91) 山田邦男 (1998) ヴィクトール・E・フランクルについて『フランクル回想録 20世紀を生きて』, 14-21.
- 93) 『人生があなたを待っている 〈夜と霧を越えて〉 1』, 47.
- 94) 『夜と霧 新版』, 55.
- 95) 『夜と霧 新版』, 145.
- 96) 『夜と霧 新版』, 5.
- 97) 『夜と霧 新版』, 93
- 98) 『夜と霧 新版』, 115.
- 99) 『夜と霧 新版』, 63.
- 100) 『夜と霧 新版』, 67
- 101) 『夜と霧 新版』, 80.
- 102) 『夜と霧 新版』, 113.
- 103) 『人生があなたを待っている 〈夜と霧を越えて〉 2』, 488-490.
- 104) 『人生があなたを待っている 〈夜と霧を越えて〉 2』, 491.
- 105) 『夜と霧 新版』, 130-131.
- 106) 『人生があなたを待っている 〈夜と霧を越えて〉 2』, 468-506.
- 107) 『夜と霧 新版』, 104.

霜山徳爾訳（1956）『夜と霧』への訳者あとがき 207-208.

注

- 注1：河原理子（2012）『フランクル『夜と霧』への旅』平凡社による。何カ国語に訳されたかは、文献によって、十数カ国、三十カ国語としているものもあり、一致しない。最も多い、新しいものを採用した。
- 注2：Britannica Online Academic Edition. “Holocaust (European history) <http://www.britannica.com/EBchecked/topic/269548/Holocaust>. 2012.10.10 閲覧によれば、子どもを含む600万人のユダヤ人と、何百万人ものその他の人びとが殺された。
- 注3：『夜と霧』の訳文は主に池田香代子のものによる。著者の本書との出会いは霜山に負うところが大きいものの、霜山訳は1947年発行、池田訳は1977年発行の原著に基く。フランクル自身が改訂を加えているためである。本稿では、新しい版に基づく池田訳を採用した。
- 注4：親しい相手に使う二人称単数の主語。霜山訳（1956）では訳出されていない。
- 注5：邦訳が出ているものとしては『現代人の病—心理療法と実存哲学』『<生きる意味>を求めて』『意味への意志』『苦悩する人間』『識られざる神』『それでも人生にイエスと言う』『人間とは何か』等がある。
- 注6：次のサイトでは、29本のフランクルの講演、ビデオを見ることが可能である。http://www.youtube.com/view_play_list?p=A84B17C545265213&feature=bf-title（2012年9月8日現在）

Victor E. Frankl *Yoru to Kiri (Man's Search for Meaning)*
revisited

— *How the psychiatrist lived his fate* —

AKIMOTO Michiko

Abstract

A worldwide best seller *Yoru to Kiri* (the original German title : *EIN PSYCHOLOGE ERLEBT DAS KONZENTRATIONSLAGER*, the English title: *Man's Search for Meaning*) was written by a Jewish psychiatrist Viktor E. Frankl. It was first translated into Japanese by Tokuji Shimoyama, a clinical psychologist and a professor emeritus at Sophia University (an ex-professor of Toyo Eiwa University). Since its publication, it has been read by many people over generations. The book has tremendous power to inspire and to encourage. After he was released from the Nazi concentration camps, he continued to work as a psychiatrist, taught at universities, gave lectures around the world, and lived to be 92. He is a miraculous psychiatrist and a psychologist of a kind that cannot be found anywhere.

The aim of this paper was to re-read *Yoru to Kiri* and examine both from the perspective of modern trauma psychology (1) what kind of psychological reactions, defense mechanisms or coping behaviors Frankl resorted to while he was imprisoned in the Nazi concentration camps, (2) how he overcame the trauma and adapted to his life after the war, and by referencing some literature on his life and on Holocaust survivors' psychology, (3) what kind of defense mechanisms or coping behaviors were effective in surviving extreme situations.

Results:(1) It was found that Frankl showed at least some traumatic symptoms: extreme fear, denial or undoing, dissociation, repetitive and intrusive reactions (nightmares and obsession) , paralyzed or limited emotions, reduced interests, irritability and anger. The nightmares persisted till his ninties. (2) Frankl was not only using the coping behaviors as the Holocaust survivors in the literature, but he

was also rich in resources: intelligence, being a psychiatrist, warm and loving family relationships, and Jewish faith. More than anything, he supported himself by his firm conviction that the life is worthwhile living no matter how harsh it may be.

Conclusion: Frankl may have been a gifted person in many ways. But more than anything, he was willing, instead of giving in to the “fate”, he was willing to take responsibility to find the right answers and fulfill the tasks given to him. He lived with this belief all his life and has been other people’s lives meaningful.